

# 評価結果概要（3）

## 定常観測

定常観測では、長期間に亘り国際的観測網の一翼を担って、学術研究上あるいは実用上貴重な基礎的観測データを取得し続けており、我が国としての責任と役割を十分に果たしており、国際的にも大いに貢献している。

観測データの情報発信についてもデータセンターを通じて国内外の研究機関に提供されており、また広く我が国の一般国民にも提供されるなど利用層の拡大が図られていることは高く評価できる。

### 1) 電離層観測(総務省/情報通信研究機構)

南極で唯一昭和基地が電離層観測を長期間継続していることは国際的に大いに貢献している。

### 2) 気象観測(気象庁)

世界的に環境への関心が高い現在、地球規模的気候変動の定常的観測の意義は非常に大きい。

### 3) 測地観測(国土地理院)

測地測量については、ポストグレースャルリバウンドの速度が算出できたことは、大きな成果として評価できる。

昭和基地における基準点観測、GPS 連続観測、重力測量などは国際的な枠組みに基づいて計測され、その成果は国内外の研究機関から高く評価される。

### 4) 海洋物理・化学観測(海上保安庁)

地球規模の環境変動と密接に関わっている南極海の海洋物理・化学の基礎データを継続的に観測、蓄積していることの意義は非常に大きい。

### 5) 潮汐観測(海上保安庁)

計画通り、国際的な連携の強化も図られ、データ等の提供を通じた貢献がみられた。潮汐観測は、地球温暖化による海面上昇や地盤変動の把握、特に津波の観測による地震防災対策等に貢献するものであり、その成果は国内外の研究機関において有効に活用され、計画通りの成果を挙げている。

## 設営計画

第50次隊の代替輸送の解決策を探りつつも、「しらせ」後継船就航に伴う輸送システムの整備に力を注いだ。

特に、観測船の支援を受けられない期間を考慮して航空機を活用したことは、今後の南極へのアクセス方法として画期的な進歩である。

## 観測支援体制の充実

南極という極地の厳しい環境における観測隊の安全の確保は一義的に重要であり、結果として安全が確保されていることは高く評価できる。今後は「しらせ」後継船就航による人材の多様化に伴い、安全認識のレベルに応じた安全教育や同行者の位置づけの明確化について更なる強化が望まれる。

## 国際的な共同観測の推進

第Ⅶ期計画における国際的な共同観測推進のため、6項目を重視して行われた。当初の計画通り、各国との共同観測や支援、また、南極条約非加盟国への機会提供などを積極的に行い、成果を挙げた。

## 情報発信・教育活動の充実

南極教室、教員南極派遣プログラム、ホームページの開設・維持、南極展の開催、一般公開、南極・北極科学館の開設など、多様な形態で積極的に情報の発信が行われており、その努力と実績は高く評価できる。